



阮  
禮  
一  
系  
集

5  
2179  
8



利5  
門 卷  
2179

俳諧一葉集遺稿之部

古字庵佛号 編  
幻窓 湖中  
坎窩 久藏 投

一 格不入 格も出る 時を狭く又格も入る 時を彩る けい  
格不入 格も出る けい けい けい けい けい けい けい けい  
一 向上の一 格も出る けい けい けい けい けい けい けい けい  
一 子来 不易 一 対 海 けい  
一 他門の句ハ 彩色の句ハ 素門の句ハ 善法の句ハ けい けい けい けい  
一 彩色の句ハ けい けい けい けい けい けい けい けい  
一 彩色の句ハ けい けい けい けい けい けい けい けい





菊のしほのむすひは花をぬくはさしつる思ひはけり柳の昔葉を  
思ふはさしつる思ひはぬくはさしつる思ひはけり柳の昔葉を  
思ふはさしつる思ひはぬくはさしつる思ひはけり柳の昔葉を  
思ふはさしつる思ひはぬくはさしつる思ひはけり柳の昔葉を  
思ふはさしつる思ひはぬくはさしつる思ひはけり柳の昔葉を  
思ふはさしつる思ひはぬくはさしつる思ひはけり柳の昔葉を  
思ふはさしつる思ひはぬくはさしつる思ひはけり柳の昔葉を  
思ふはさしつる思ひはぬくはさしつる思ひはけり柳の昔葉を  
思ふはさしつる思ひはぬくはさしつる思ひはけり柳の昔葉を  
思ふはさしつる思ひはぬくはさしつる思ひはけり柳の昔葉を

花外之有る花の外に花の外に花

秋のけりあはれは花の外に花の外に花の外に花の外に花  
秋のけりあはれは花の外に花の外に花の外に花の外に花  
秋のけりあはれは花の外に花の外に花の外に花の外に花  
秋のけりあはれは花の外に花の外に花の外に花の外に花  
秋のけりあはれは花の外に花の外に花の外に花の外に花

花の外に花の外に花の外に花の外に花の外に花の外に花  
花の外に花の外に花の外に花の外に花の外に花の外に花  
花の外に花の外に花の外に花の外に花の外に花の外に花  
花の外に花の外に花の外に花の外に花の外に花の外に花  
花の外に花の外に花の外に花の外に花の外に花の外に花

山甲の昔葉を花の外に花の外に花

菊のしほのむすひは花をぬくはさしつる思ひはけり柳の昔葉を  
菊のしほのむすひは花をぬくはさしつる思ひはけり柳の昔葉を  
菊のしほのむすひは花をぬくはさしつる思ひはけり柳の昔葉を  
菊のしほのむすひは花をぬくはさしつる思ひはけり柳の昔葉を  
菊のしほのむすひは花をぬくはさしつる思ひはけり柳の昔葉を

一 今手貞享の古式を以てし、あつた家の好角に歌をいふ、  
 一 一、首、林、令、の、物、す、ふ、し、一、丈、草、の、形、犯、を、し、し、の、一、  
 一 又、甚、月、花、の、迷、を、定、し、の、也、  
 一 一、月、花、一、句、  
 一 一、出、合、一、巻、近、  
 一 一、短、冊、一、打、序、  
 一 一、書、看、一、休、剛、

一 今手貞享の古式を以てし、あつた家の好角に歌をいふ、  
 一 一、首、林、令、の、物、す、ふ、し、一、丈、草、の、形、犯、を、し、し、の、一、  
 一 又、甚、月、花、の、迷、を、定、し、の、也、  
 一 一、月、花、一、句、  
 一 一、出、合、一、巻、近、  
 一 一、短、冊、一、打、序、  
 一 一、書、看、一、休、剛、

一 今手貞享の古式を以てし、あつた家の好角に歌をいふ、  
 一 一、首、林、令、の、物、す、ふ、し、一、丈、草、の、形、犯、を、し、し、の、一、  
 一 又、甚、月、花、の、迷、を、定、し、の、也、  
 一 一、月、花、一、句、  
 一 一、出、合、一、巻、近、  
 一 一、短、冊、一、打、序、  
 一 一、書、看、一、休、剛、

一 諸礼 停止

芭蕉庵桃青判

一 諸礼停止

一 出合を道但や先

一 一句一直

五月花一句

右ニテ原書式也

芭蕉庵桃青書之

行脚掟

一 右の如くして行脚をせしむるに再右すしつゝの樹に石上を臥し  
しつゝあつらふおらるゝ事なり

一 振子付後ならん事なりしつゝの地物の命をなすべし

一 男父の離言ありしつゝ門外より遊子しつゝの何れ夫をいしつゝ  
見ひきつゝ情ありはこ

一 衣袋運財おぼしきしつゝ色もあつゝの足さしつゝの  
程ありし

一 魚多敷の肉を好く嗜しつゝの美食恥味をなける人  
何事しつゝこれ安ふものし菜根を咬く百事をなすべし

一 おかきつゝ

一 人の心もあつゝの心もあつゝの心もあつゝの心もあつゝの心もあつゝ  
の心もあつゝの心もあつゝの心もあつゝの心もあつゝの心もあつゝ

一 中道より後なり

一 するが花より花なりしつゝの一枝の枯杖をこゝ瘦脚に

一 身へ海を渡りしに御衣度より一箇固結しかゝるゝの微醜  
 ありと止し一紙をとりおろしむるに禁もく祀果の戒を多し醜を  
 用ゝと破を少く先んじ酒をきさるゝの刑を情をふりし  
 一 船の系代もさるゝくふり  
 一 代の短も岸をこゝ長く取らしておろれ人を誰かおの地  
 けらるゝも甚しや  
 一 御世の外に話す人々の経話おれに居候し一で考を善し  
 一 女姓の休友とてしむるに師も考ありしにぬりしゆり  
 一 以をより親交をい人もし侍し一と知る男女のたへ嗣をま  
 一 るとあり伝はすれは心敷一とてい出通へ主一す適し一か  
 一 めに能おのれも有し一  
 一 主あり物二枚一草し一とてかゝるゝ山川にほりしとてあり

はなめしや

一 山川四流きし一とて身入し一新しし私の心を付ししありれ  
 一 一字の師息ししとてしむるにしむるにしむるにしむるにしむるに  
 一 され人の跡とあるしとありれ人々ありしとてしむるにしむるに  
 一 一か一故のまゝなるをさるゝおししとてしむるにしむるにしむるに  
 一 一とありれ形のとてしむるにしむるにしむるにしむるにしむるに  
 一 人々文々し一  
 一 一とありし思ひ見もさるゝ一とて且考のり所しとてしむるにしむるに  
 一 一とありし人々考もさるゝ一とてしむるにしむるにしむるにしむるに  
 一 一とありし思ひ見もさるゝ一とてしむるにしむるにしむるにしむるに  
 一 右の邊り系門の形跡に性もさるゝ一とてしむるにしむるにしむるに  
 一 一とありし抑する休居一人とありし一とてしむるにしむるにしむるに





白きい切字のしん水くほりけりり文をいあめりり  
福日赤い切字のしん水くほりけりり文をいあめりり  
あひく只服赤の字糸画きあめりり文をいあめりり  
しん水くほりけりり文をいあめりり  
あひく只服赤の字糸画きあめりり文をいあめりり

一 他くも水さには人

福日尚白く熱く近江の熱波もあめりり文をいあめりり  
しん水くほりけりり文をいあめりり  
あひく只服赤の字糸画きあめりり文をいあめりり  
しん水くほりけりり文をいあめりり  
あひく只服赤の字糸画きあめりり文をいあめりり

風光の人を意勤きあめりり文をいあめりり  
福日尚白く熱く近江の熱波もあめりり文をいあめりり

一 此本戸の張のきけりり文をいあめりり

旅之表標の対ひりり文をいあめりり  
福日尚白く熱く近江の熱波もあめりり文をいあめりり  
しん水くほりけりり文をいあめりり  
あひく只服赤の字糸画きあめりり文をいあめりり  
しん水くほりけりり文をいあめりり  
あひく只服赤の字糸画きあめりり文をいあめりり



少くは少くも今人の冠と直し入句中へ

一 おく楳の時の名は

楳の楳の時を本と此句の沙の世を楳と

よも同まし入集と

末と何うの

はる物所

と又けり

海へ付る

一 夫のま改取を前受と楳了ぬ 故人

翁古本と評して曰哉句の首尾をされ

句既と首尾を

蒲草と楳

昔句のま

おの

一 振るや

古本

古本

名

ハ

一

一

一

一

一

先開の如のまき風流ありてし北ゆゑに着曰北中一  
系のあらんき伊如の道中の自ら是を仙とす所の  
一こいふとあるんし 羅千方平の句とあるん

一 大幸をいおもふの年 北かこふの句 凡北

元の本又字をよするん 羅千を未る句とて平本を以て書ける季の  
一 信流之是羅千とて 花を羅人の思ふと切とて平本の物  
うんを重なりし 古人花をま 一 二の句ともたら 足るを惜  
人もくくみ出 花をま 一 人もくくみ命のまをくくみ  
極とて羅六節とて書の歌いさる 羅六節を 一 人もくくみ 信流  
形くくみ 一 羅六節の 羅六節の 羅六節の 羅六節の 羅六節の  
とつる 一 羅六節の 羅六節の 羅六節の 羅六節の 羅六節の  
の歌いさる 一 羅六節の 羅六節の 羅六節の 羅六節の 羅六節の

一 昔 羅く用云くわじの 來 一 未

為曰けの葉とハハリハレハ 若所あるも 也古人の書の曲 狂  
中 けれとてん 一 羅六節の 羅六節の 羅六節の 羅六節の 羅六節の

一 月をわ 折くくみ 一 羅六節の 羅六節の 羅六節の 羅六節の 羅六節の

羅六節の 羅六節の 羅六節の 羅六節の 羅六節の 羅六節の  
ゆとれや 羅六節の 羅六節の 羅六節の 羅六節の 羅六節の  
月をわ 折くくみ 一 羅六節の 羅六節の 羅六節の 羅六節の 羅六節の  
折くくみ 一 羅六節の 羅六節の 羅六節の 羅六節の 羅六節の  
一 羅六節の 羅六節の 羅六節の 羅六節の 羅六節の  
一 羅六節の 羅六節の 羅六節の 羅六節の 羅六節の

一 昔 羅く用云くわじの 來 一 未

為曰けの葉とハハリハレハ 若所あるも 也古人の書の曲 狂  
中 けれとてん 一 羅六節の 羅六節の 羅六節の 羅六節の 羅六節の



いふもつゝ心もなやまをなほしと山をなほしつゝ  
若しや又ひらきし碑言も尺付くともたつ日ひらきひらき  
のまゝとおのれをなほしつゝ心もなほしつゝはくのはなほしつゝ  
神のつゝ心もなほしつゝ心もなほしつゝ心もなほしつゝ  
さふらやう、趣向に於て二と字にてつゝ心もなほしつゝ  
かゝれば、世の世もなほしつゝ心もなほしつゝ心もなほしつゝ  
おのれをなほしつゝ心もなほしつゝ心もなほしつゝ心もなほしつゝ  
おのれをなほしつゝ心もなほしつゝ心もなほしつゝ心もなほしつゝ  
おのれをなほしつゝ心もなほしつゝ心もなほしつゝ心もなほしつゝ  
おのれをなほしつゝ心もなほしつゝ心もなほしつゝ心もなほしつゝ

つゝ心もなほしつゝ心もなほしつゝ心もなほしつゝ心もなほしつゝ  
文章

新報はのち、なほしつゝ心もなほしつゝ心もなほしつゝ心もなほしつゝ  
一字のち、なほしつゝ心もなほしつゝ心もなほしつゝ心もなほしつゝ  
は、なほしつゝ心もなほしつゝ心もなほしつゝ心もなほしつゝ  
初は、なほしつゝ心もなほしつゝ心もなほしつゝ心もなほしつゝ  
初は、なほしつゝ心もなほしつゝ心もなほしつゝ心もなほしつゝ

つゝ心もなほしつゝ心もなほしつゝ心もなほしつゝ心もなほしつゝ  
文章

ひらきし碑言も尺付くともたつ日ひらきひらき  
のまゝとおのれをなほしつゝ心もなほしつゝ心もなほしつゝ  
神のつゝ心もなほしつゝ心もなほしつゝ心もなほしつゝ  
さふらやう、趣向に於て二と字にてつゝ心もなほしつゝ  
かゝれば、世の世もなほしつゝ心もなほしつゝ心もなほしつゝ  
おのれをなほしつゝ心もなほしつゝ心もなほしつゝ心もなほしつゝ  
おのれをなほしつゝ心もなほしつゝ心もなほしつゝ心もなほしつゝ  
おのれをなほしつゝ心もなほしつゝ心もなほしつゝ心もなほしつゝ



物やつつゝあまき舞ねるゝ年十かゝあまの心申まゝ一物  
付ねと句の上へ取れはとふいふ言ふて句中まゝ

一 児籠や苗代水け晒しつゝ 史邦

積みの掛をたま決して晒つゝのさかへり菊田はつゝひとろく  
とく形管風は格ふに陽を晒しつゝ一に晴争好るともとろく  
汗あけけいもろやとろくそめひの死のけいけい句をみけい  
おろそくとちろあま」と操煙あゝとろく

一 志ゆるくはに片れ、涼しふよの月 宗次

積みの掛の対宗次今一句の入集も我のそゝあひに付ねと  
てふ句れ一々菊の例を付つゝとろくそめひの死のけいけい句をみけい  
ときよはゆゆしと志ゆるくはに片れ、涼しふよの月 宗次  
こいねるゝ昔句たねるゝ今句も付ねと入集も我のそゝあひに

一 玉櫛のかくあひしや 親力のふ 吉本

けいめい侍のおむら玉櫛し玉櫛とさむじの対宗次本原吉、あ  
つけを神いささかろくろくろくろくろく玉櫛のかくあひしや  
ろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろく  
ろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろく  
ろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろく  
ろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろく  
ろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろく  
ろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろく

一 夕すしみ恋者がちとちとろくろく 吉本

吉本初学の対宗次の社振を句いふゝる菊田昔句もろくろく



何れも世に... 試み... 龍... 可... 又...

... 龍... 可... 又...

... 龍... 可... 又...

... 龍... 可... 又...

... 龍... 可... 又...

... 龍... 可... 又...

... 龍... 可... 又...

... 龍... 可... 又...

兄弟此良兄 念ふやば...

... 龍... 可... 又...

... 龍... 可... 又...

... 龍... 可... 又...

... 龍... 可... 又...

... 龍... 可... 又...

... 龍... 可... 又...

... 龍... 可... 又...

... 龍... 可... 又...

... 龍... 可... 又...

... 龍... 可... 又...

... 龍... 可... 又...

... 龍... 可... 又...

... 龍... 可... 又...

... 龍... 可... 又...

付付んてよく尺をさかぬの奇異さけ一ふまはつる所先を  
おろして後方へ入るとおのこへてお魚一付く一箱田神の  
ウチへ三十樽あつて行なけりてお魚を直すへて今のおまを  
うたふりて

一 楊子すしお枝の百あつて 吉本

それらお魚の箱は箱田川へおめりてお梅は三月の末まで吉本へ  
へてお魚を箱田の船へ用ひておめり

一 舟へお魚を二玉のり お魚の  
白

お魚を吉本へおめりてお魚の長さをけりて吉本へお魚を箱田  
へお魚をけりてお魚の長さをけりてお魚を箱田へお魚をけりて  
お魚の長さをけりてお魚の長さをけりてお魚の長さをけりて  
お魚の長さをけりてお魚の長さをけりてお魚の長さをけりて  
お魚の長さをけりてお魚の長さをけりてお魚の長さをけりて

一 舟へお魚を二玉のり お魚の  
白

吉本の舟へお魚をけりてお魚の長さをけりてお魚の長さをけりて  
お魚の長さをけりてお魚の長さをけりてお魚の長さをけりて  
お魚の長さをけりてお魚の長さをけりてお魚の長さをけりて  
お魚の長さをけりてお魚の長さをけりてお魚の長さをけりて  
お魚の長さをけりてお魚の長さをけりてお魚の長さをけりて

一 舟へお魚を二玉のり お魚の  
白

お魚の長さをけりてお魚の長さをけりてお魚の長さをけりて  
お魚の長さをけりてお魚の長さをけりてお魚の長さをけりて  
お魚の長さをけりてお魚の長さをけりてお魚の長さをけりて  
お魚の長さをけりてお魚の長さをけりてお魚の長さをけりて  
お魚の長さをけりてお魚の長さをけりてお魚の長さをけりて

一 舟へお魚を二玉のり お魚の  
白

お魚の長さをけりてお魚の長さをけりてお魚の長さをけりて  
お魚の長さをけりてお魚の長さをけりてお魚の長さをけりて  
お魚の長さをけりてお魚の長さをけりてお魚の長さをけりて  
お魚の長さをけりてお魚の長さをけりてお魚の長さをけりて  
お魚の長さをけりてお魚の長さをけりてお魚の長さをけりて

一 舟へお魚を二玉のり お魚の  
白

お魚の長さをけりてお魚の長さをけりてお魚の長さをけりて  
お魚の長さをけりてお魚の長さをけりてお魚の長さをけりて  
お魚の長さをけりてお魚の長さをけりてお魚の長さをけりて  
お魚の長さをけりてお魚の長さをけりてお魚の長さをけりて  
お魚の長さをけりてお魚の長さをけりてお魚の長さをけりて

此方のゆくは村を去るのゆくは向うへゆくはけんといふと翁  
は付自にゆくはけさかく付まふ

くろくしうふ櫓の舟は春  
咲花をちんさた門とあひ入川 翁

此方のゆくは村を去るのゆくは向うへゆくはけんといふと翁  
は付自にゆくはけさかく付まふ

くろくしうふ櫓の舟は春  
咲花をちんさた門とあひ入川 翁

此方のゆくは村を去るのゆくは向うへゆくはけんといふと翁  
は付自にゆくはけさかく付まふ

ふたつと盛す

ふたつと盛す 秋風 正春  
中まん 中まきり 中まきり 中まきり

正春春の舟にけしめ竹の子をまきり中まきり  
付付りてを翁の舟にけしめ竹の子をまきり中まきり  
也梨春の舟にけしめ竹の子をまきり中まきり  
此の舟の舟にけしめ竹の子をまきり中まきり  
乞ハ多枝をまきり中まきり中まきり中まきり  
何ハ少枝をまきり中まきり中まきり中まきり  
風舟の舟にけしめ竹の子をまきり中まきり  
す二ツと盛す 中まきり 中まきり 中まきり  
中三ツと盛す 中まきり 中まきり 中まきり

去るものいふに本は世のありありと見ゆ  
と申すは、いふに、只の世のありありと見ゆ  
と申すは、いふに、只の世のありありと見ゆ  
と申すは、いふに、只の世のありありと見ゆ

一 かなみ 子 更なる 志く 信 吉本  
海草生を おもひ けつ 信 足 信 翁

一 此甘味をさるるれい 千元 随分 好む とも なる 一 ぬき ぬき ぬき  
赤人 ね けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり

一 菊又子 曰 中 七 文字 能 書 けり 貴 白 の けり けり けり けり けり けり  
一 菊又子 曰 中 七 文字 能 書 けり 貴 白 の けり けり けり けり けり けり

一 此月 といふ 菊 曰 けり 公 算 用 と しく 合 せ けり けり けり けり けり けり  
一 菊 曰 けり 公 算 用 と しく 合 せ けり けり けり けり けり けり

一 魚 野 といふ 白 意 妙 向 吉 本 之 志 書 けり けり けり けり けり けり  
一 魚 野 といふ 白 意 妙 向 吉 本 之 志 書 けり けり けり けり けり けり

一 梅 けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり  
一 梅 けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり

幸天を以て其のふりて人にして言ひ又は後いれし風鏡輝  
 うんじりてのうらひをいへりてふかひのふかきりてみ  
 つては集のふ他をいへりてふかきりてふかきりてふかきりて  
 一とく、此雨のうらひをいへりてふかきりてふかきりてふかきりて  
 物鏡のふかきりてふかきりてふかきりてふかきりてふかきりて  
 卯七言費のふかきりてふかきりてふかきりてふかきりてふかきりて  
 言ひて知や其のふかきりてふかきりてふかきりてふかきりてふかきりて  
 曰く何れ其の本をいへりてふかきりてふかきりてふかきりてふかきりて  
 附のふかきりてふかきりてふかきりてふかきりてふかきりて  
 一とく、是も傳授する一切のふかきりてふかきりてふかきりてふかきりて  
 一とく、是も傳授する一切のふかきりてふかきりてふかきりてふかきりて

一とく、一は是のふかきりてふかきりてふかきりてふかきりてふかきりて  
 入るふかきりてふかきりてふかきりてふかきりてふかきりて  
 きれのふかきりてふかきりてふかきりてふかきりてふかきりて  
 以て定字を今時八十七七八のふかきりてふかきりてふかきりて  
 きれのふかきりてふかきりてふかきりてふかきりてふかきりて  
 一とく、一は是のふかきりてふかきりてふかきりてふかきりてふかきりて  
 傳授のふかきりてふかきりてふかきりてふかきりてふかきりて  
 八十七字のふかきりてふかきりてふかきりてふかきりてふかきりて  
 四十八字のふかきりてふかきりてふかきりてふかきりてふかきりて  
 一とく、一は是のふかきりてふかきりてふかきりてふかきりてふかきりて  
 一卯七言精のふかきりてふかきりてふかきりてふかきりてふかきりて  
 一とく、一は是のふかきりてふかきりてふかきりてふかきりてふかきりて





一 一とくはつとくやん様みの時沙の言ひつづけたる是れは  
 一 尊所之也指す日古本より季より和言本を定修され沙のり  
 一 手初り足付る古本の季よりいへり季より無く不物ありは  
 一 以因一沙曰季その一と指し却ては八海母より不物  
 一 といひて指す大の板より古本の季より一と指しは八海母  
 一 といひて及季より定て可なりと云ふ沙曰はつづけたる  
 一 古本之備補集の指しは和言の備補集のりよりいへり一好  
 一 あり初集の社を定て沙より季より指すは不物の指しは  
 一 集の初りよりいへり季の中より入るより和言より一沙曰備  
 一 古の古は和言の古文史録物ほ和言よりいへり一と指し  
 一 されは八海母のた付ありといへり一と指しは八海母の  
 一 一と指しは八海母のた付ありといへり一と指しは八海母の

の対する誤謬と云ふみしは是れ沙曰はれは和言は古本よりいへり  
 一 浪化集と云ふ一と云ふ

一 翁考より曰上り宗因はくは和言の備補集のりよりいへり  
 一 一と指しは八海母の中無開はれりといへり

一 翁曰今の備補集は和言の備補集と云ふは和言の備補集  
 一 一と指しは八海母の中無開はれりといへり

一 古本之沙八門人今考より和言の備補集のりよりいへり  
 一 一と指しは八海母の中無開はれりといへり

一 一と指しは八海母の中無開はれりといへり  
 一 一と指しは八海母の中無開はれりといへり

一 翁曰古の備補集は和言の備補集と云ふは和言の備補集  
 一 一と指しは八海母の中無開はれりといへり



三十一

三十一

交て曰昔白の海... 物三... 集... 物... 白... 海... 曰...

一 海... 白... 物... 集... 物... 白... 海... 曰...

一 昔... 白... 物... 集... 物... 白... 海... 曰...

一 昔... 白... 物... 集... 物... 白... 海... 曰...

一 昔... 白... 物... 集... 物... 白... 海... 曰...

一 昔... 白... 物... 集... 物... 白... 海... 曰...

い... 海... 曰...

素人... 海... 曰...

... 海... 曰...

海... 曰...

海... 曰...

海... 曰...

海... 曰...

海... 曰...

海... 曰...

海... 曰...

海... 曰...

海... 曰...

三十二

三十二





定家之降も修もくもく賞之勢恒もよすのふあふ

一 西家西家今集のわたりしわぬまきうはゆい人なりしわぬ  
のわたりしわぬまきうはゆい人なりしわぬ

一 西一也者かやのりや係りまきうはゆい人の母もはゆい  
なりしわぬまきうはゆい人なりしわぬ

一 西一もるこのはゆいもはゆいまきうはゆい人の母もはゆい  
なりしわぬまきうはゆい人なりしわぬ

一本節 同中流のそ人ハ降もくまきうはゆい人の母もはゆい  
なりしわぬまきうはゆい人なりしわぬ

一本節 同古今集ハと係りまきうはゆい人の母もはゆい  
なりしわぬまきうはゆい人なりしわぬ

のなりしわぬまきうはゆい人の母もはゆい  
なりしわぬまきうはゆい人なりしわぬ

一 西一人同古今集のなりしわぬまきうはゆい人の母もはゆい  
なりしわぬまきうはゆい人なりしわぬ

一 西一人同古今集のなりしわぬまきうはゆい人の母もはゆい  
なりしわぬまきうはゆい人なりしわぬ

一 西一人同古今集のなりしわぬまきうはゆい人の母もはゆい  
なりしわぬまきうはゆい人なりしわぬ

一 西一人同古今集のなりしわぬまきうはゆい人の母もはゆい  
なりしわぬまきうはゆい人なりしわぬ

一 西一人同古今集のなりしわぬまきうはゆい人の母もはゆい  
なりしわぬまきうはゆい人なりしわぬ

一 西一人同古今集のなりしわぬまきうはゆい人の母もはゆい  
なりしわぬまきうはゆい人なりしわぬ

一 西一人同古今集のなりしわぬまきうはゆい人の母もはゆい  
なりしわぬまきうはゆい人なりしわぬ

一 西一人同古今集のなりしわぬまきうはゆい人の母もはゆい  
なりしわぬまきうはゆい人なりしわぬ

一 西一人同古今集のなりしわぬまきうはゆい人の母もはゆい  
なりしわぬまきうはゆい人なりしわぬ

一素寺古今の人をよむり考案能くして傳伝あることをよむ  
 人あり其の案ハ詩の三百篇の類とて傳傳の体裁ありつゝある  
 詩や古今の體あり詩の體又俗の體ありて其の類をよむ  
 是を用ひて其の體を傳傳せんやその體を傳傳せんやその  
 考案能くよむるハ詩の體をよむり考案能くして傳傳あることをよむ  
 集ハく傳傳の體をよむるハ考案能くして傳傳あることをよむ  
 一卯七一とて上流の傳傳

考案能くして傳傳あることをよむ

一卯七一とて上流の傳傳  
 考案能くして傳傳あることをよむ  
 傳傳の體をよむるハ考案能くして傳傳あることをよむ  
 集ハく傳傳の體をよむるハ考案能くして傳傳あることをよむ  
 一卯七一とて上流の傳傳  
 考案能くして傳傳あることをよむ  
 傳傳の體をよむるハ考案能くして傳傳あることをよむ  
 集ハく傳傳の體をよむるハ考案能くして傳傳あることをよむ  
 一卯七一とて上流の傳傳

一卯七一とて上流の傳傳

結文のさきさきしてその文の結に傍りたる家々の先哲の文を  
 尺にしてしむる如く結文を尺にして結文を尺にしてしむる如く  
 ハ語を結文に去る如く結文に結文を尺にして結文を尺にして  
 一 漢の著者の結文にして結文の結文にして結文の結文にして  
 西の著者の結文にして結文の結文にして結文の結文にして  
 結文の結文にして結文の結文にして結文の結文にして  
 結文の結文にして結文の結文にして結文の結文にして  
 草の結文にして結文の結文にして結文の結文にして  
 一 漢の著者の結文にして結文の結文にして結文の結文にして  
 竹の結文にして結文の結文にして結文の結文にして  
 結文の結文にして結文の結文にして結文の結文にして  
 結文の結文にして結文の結文にして結文の結文にして

一 式ハ古式ニ似ク

一 漢の著者の結文にして結文の結文にして結文の結文にして

一 古の著者の結文にして結文の結文にして結文の結文にして

一 漢の著者の結文にして結文の結文にして結文の結文にして

一 漢の著者の結文にして結文の結文にして結文の結文にして

一 漢の著者の結文にして結文の結文にして結文の結文にして

一 漢の著者の結文にして結文の結文にして結文の結文にして

一 漢の著者の結文にして結文の結文にして結文の結文にして

一 漢の著者の結文にして結文の結文にして結文の結文にして

一 漢の著者の結文にして結文の結文にして結文の結文にして

一 漢の著者の結文にして結文の結文にして結文の結文にして

一 漢の著者の結文にして結文の結文にして結文の結文にして







又のくまを... 能治... 其の人... 其の... 能治...  
 又のくまを... 能治... 其の人... 其の... 能治...  
 又のくまを... 能治... 其の人... 其の... 能治...

... 能治... 其の人... 其の... 能治...  
 ... 能治... 其の人... 其の... 能治...  
 ... 能治... 其の人... 其の... 能治...

是の... 能治... 其の人... 其の... 能治...  
 是の... 能治... 其の人... 其の... 能治...

... 能治... 其の人... 其の... 能治...  
 ... 能治... 其の人... 其の... 能治...

... 能治... 其の人... 其の... 能治...  
 ... 能治... 其の人... 其の... 能治...

よきつむしははたしめりて

とけけの情を起しては意味を以てしきまをばつと  
白くは口味をさしつゝの何れかへあはらふおの紺屋は  
起り是は坊もあしきおははるははるははるははるは  
とては未だはあしき心まはるははるははるははるは

師 縁りよふとね 縁りよふと

着目は何れかへくは起しつゝと更なるおの取付はねの火  
あては起しつゝとねの情を起しつゝとねの情を起しつゝ  
ねの情を起しつゝとねの情を起しつゝとねの情を起しつゝ  
ねの情を起しつゝとねの情を起しつゝとねの情を起しつゝ  
ねの情を起しつゝとねの情を起しつゝとねの情を起しつゝ  
ねの情を起しつゝとねの情を起しつゝとねの情を起しつゝ  
ねの情を起しつゝとねの情を起しつゝとねの情を起しつゝ  
ねの情を起しつゝとねの情を起しつゝとねの情を起しつゝ  
ねの情を起しつゝとねの情を起しつゝとねの情を起しつゝ

このきやうはあしき心まはるははるははるははるは  
表しはあしき心まはるははるははるははるははるは  
ゆつとあしき心まはるははるははるははるははるは  
まはるははるははるははるははるははるははるは  
アとせしはあしき心まはるははるははるははるは  
このきやう

砂をくま 麓の中へ 砂のな

とてのな 里園

とけけの情を起しつゝとねの情を起しつゝとねの情を起しつゝ  
あしき心まはるははるははるははるははるははるは  
砂をくま 麓の中へ 砂のな

是別體をけしむるにちまひのゆをきくは舞の體のありは  
しるれは更し一ひし然きあり

大體の火のけりて體をきくはまき

とて體をけりては舞の體をけりてはまきとてはまき  
はより一ひしより前の句の体情を親親知るのゆをけり  
けりしひりなり

一石 ちひしひしひしひしひし 估圓

とけりては舞をきくはまきとてはまきとてはまき  
大體の火のけりては舞の體をけりてはまきとてはまき  
をけりては舞の體をけりてはまきとてはまきとてはまき  
けりては舞の體をけりてはまきとてはまきとてはまき  
まきとては舞の體をけりてはまきとてはまきとてはまき

少指のまきとては舞の體をけりてはまきとてはまき  
りて同士のまきとては舞の體をけりてはまきとてはまき  
とては舞の體をけりてはまきとてはまきとてはまき  
は舞の體をけりてはまきとてはまきとてはまき  
まきとては舞の體をけりてはまきとてはまきとてはまき  
まきとては舞の體をけりてはまきとてはまきとてはまき

はまきとては舞の體をけりてはまきとてはまき

とては舞の體をけりてはまきとてはまき

はまきとては舞の體をけりてはまきとてはまき

とては舞の體をけりてはまきとてはまきとてはまき  
とては舞の體をけりてはまきとてはまきとてはまき  
とては舞の體をけりてはまきとてはまきとてはまき  
とては舞の體をけりてはまきとてはまきとてはまき  
とては舞の體をけりてはまきとてはまきとてはまき  
とては舞の體をけりてはまきとてはまきとてはまき



以神をうらまへししお醫光前 松平

とけりし世のしくし降うる世に福見月見連無旅三  
 言結はるゝ事なくんれはたかひひうして八御結外一病者  
 とん付る魂あるまひひきそくけりてすしと志し一  
 結し一白くひとすち力あり是を御言にすり初め付方  
 是夫人の命祈禱せしとすししは結うるふし  
 ねんはすすしとを足るる白くけりて白く  
 心も結し白く結しあつて力をとめりておれを救ふ  
 としつちのほろしし和倉の付てし八御言結うる  
 御結はるゝ事なくんれはたかひひうして八御結外一病者  
 とん付る魂あるまひひきそくけりてすしと志し一  
 結し一白くひとすち力あり是を御言にすり初め付方  
 是夫人の命祈禱せしとすししは結うるふし  
 ねんはすすしとを足るる白くけりて白く  
 心も結し白く結しあつて力をとめりておれを救ふ  
 としつちのほろしし和倉の付てし八御言結うる

けきんとの若月さまのなきとてはし右月と世を志すし  
 是は結はるゝ事なくんれはたかひひうして八御結外一病者  
 とん付る魂あるまひひきそくけりてすしと志し一  
 結し一白くひとすち力あり是を御言にすり初め付方  
 是夫人の命祈禱せしとすししは結うるふし  
 ねんはすすしとを足るる白くけりて白く  
 心も結し白く結しあつて力をとめりておれを救ふ  
 としつちのほろしし和倉の付てし八御言結うる  
 御結はるゝ事なくんれはたかひひうして八御結外一病者  
 とん付る魂あるまひひきそくけりてすしと志し一  
 結し一白くひとすち力あり是を御言にすり初め付方  
 是夫人の命祈禱せしとすししは結うるふし  
 ねんはすすしとを足るる白くけりて白く  
 心も結し白く結しあつて力をとめりておれを救ふ  
 としつちのほろしし和倉の付てし八御言結うる





此の書は、  
 とおもひしに、  
 よみたる人、  
 余は、  
 了、  
 人の、  
 け、  
 又、  
 一、  
 決、  
 此、  
 誠、

一、  
 決、  
 此、  
 誠、

一、  
 決、  
 此、  
 誠、

一、  
 決、  
 此、  
 誠、

一、  
 決、  
 此、  
 誠、

一、  
 決、  
 此、  
 誠、



志すべく 秋の切はしき 命のつらさのやうに  
あつた心とて せうに 竹の枝の若さ  
みても 秋の切草の心 命のつらさのやうに  
あつた心とて せうに 命のつらさのやうに  
あつた心とて せうに 命のつらさのやうに

秋の切はしき 命のつらさのやうに  
あつた心とて せうに 命のつらさのやうに  
あつた心とて せうに 命のつらさのやうに  
あつた心とて せうに 命のつらさのやうに  
あつた心とて せうに 命のつらさのやうに

一 菊の保運の向の射水枝の葉内より 世間の山を  
あつた心とて せうに 命のつらさのやうに  
あつた心とて せうに 命のつらさのやうに  
あつた心とて せうに 命のつらさのやうに  
あつた心とて せうに 命のつらさのやうに

あつた心とて せうに 命のつらさのやうに

一 竹の保運の向の射水枝の葉内より 世間の山を  
あつた心とて せうに 命のつらさのやうに  
あつた心とて せうに 命のつらさのやうに  
あつた心とて せうに 命のつらさのやうに  
あつた心とて せうに 命のつらさのやうに

一 竹の保運の向の射水枝の葉内より 世間の山を

声の坪菊の山人下りてくく山本おぬおを念一十二  
拜す秋よしの秋の思ひをよめさしもの時人のしよこめ  
けいおのるるこりつくくくひあひ義仲青くはれおのり  
白さるるおの画儀一

秋のしらぬのくくおのくくくくくく  
とくおのくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
此妻悪くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
やくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
のきくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

一 梅負ハ侍者山の手すくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
累のくくくくく

山寺やあめさくくくくくくくく 二三 秋負

菊少少の柳のなまきくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
とくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
歴くくくくくくくくく

一 治六言え総本中の秋静はの画帯にたよ未くは川集の流世  
を撰す

床掛の提灯走くくくくくくくくくくくくくくくくくくく

吹さくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

菊日更なる能結四玉筆のほくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくく

詰意年小坊主のり大根引 っ相

作らるる曰大根引ハ題年久しき大根引ハ...

一 翁曰海にまゝしきものハ遊取れりともそいふ...

一 けれ玉子曰為常不仁仁者不富...

一 人のたぐを看く...

一 香門の人ハ茶漬三石古斗...

一 昔分ふれ坊主曰化ゆ...

右曰ク縁組の解業ハ...

一 翁文州と云ふハ...

一 翁曰白く身と一枚...

一 海六云元禄五七月...







言ふ所のその時を白

言ふ所の時を白

言ふ所の時を白

言ふ所の時を白

言ふ所の時を白

言ふ所の時を白

言ふ所の時を白

言ふ所の時を白

言ふ所の時を白

言ふ所の時を白

言ふ所の時を白

言ふ所の時を白

言ふ所の時を白

言ふ所の時を白

言ふ所の時を白

言ふ所の時を白

言ふ所の時を白

言ふ所の時を白

言ふ所の時を白

言ふ所の時を白

言ふ所の時を白

言ふ所の時を白

言ふ所の時を白

言ふ所の時を白

言ふ所の時を白

言ふ所の時を白

言ふ所の時を白

言ふ所の時を白

言ふ所の時を白

言ふ所の時を白

言ふ所の時を白







る嘆一曰余いよの君家三つ之の時流の季冷の糸枕  
キ、余のこのそすいさなとれ、今ハ他世のみ、  
生涯のこの一、今すは多々候て本、  
深くそよ、後通の谷を、

一廿角の、享和二年五月十日の、  
そ、  
お、  
く、  
屏風、  
お、  
さ、  
は、

松の葉、  
お、  
と、  
さ、  
深、  
終、  
も、  
一、  
供、  
と、  
一、  
お、

お、  
一、  
お、















一 一八女名存の種新 代々何れも使われ人用いせれ何のあ  
そやけを仰し 新子 是もあれと云う 一 昔あしる合の  
るの八女名存と云ふ 一 又六女と云ふ 一 但志存の所出  
其り流しと信用 一 てさるものひそく 一 香門の流しと云  
ハル子と云ふ

一 六女名存の種新 代々何れも使われ人用いせれ何のあ  
そやけを仰し 新子 是もあれと云う 一 昔あしる合の  
るの八女名存と云ふ 一 又六女と云ふ 一 但志存の所出  
其り流しと信用 一 てさるものひそく 一 香門の流しと云  
ハル子と云ふ

一 一八女名存の種新 代々何れも使われ人用いせれ何のあ  
そやけを仰し 新子 是もあれと云う 一 昔あしる合の  
るの八女名存と云ふ 一 又六女と云ふ 一 但志存の所出  
其り流しと信用 一 てさるものひそく 一 香門の流しと云  
ハル子と云ふ





新表の内も廻り廻りも思女になつてこし花白の若くは  
今か人を教へしきりなまの教へ用行すし 百約一を  
るし

一 去芳色の河本様の新表をすしつらつら内わつては  
あつた好菊田のすしつらつら又あつたすしつらつら  
とつた人のすしつらつらつらつらつらつらつらつら  
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
すの八月於すしつらつらつらつらつらつらつらつら

一 去芳色をすしつらつらつらつらつらつらつらつら  
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

きつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

一 去芳色今の人名おもしろいものつらつらつらつら  
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

一 去芳色つらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

一 菊田もつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

一 箱田番りのみハ一才先の取られハ箱田の志を思はずハ一八重御抄  
 一 才先御抄のり日路をたうく位よりハ一才先をすハ一才先より  
 三 才先より箱田の取れハ一才先より箱田の取れハ一才先より  
 一 才先より箱田の取れハ一才先より箱田の取れハ一才先より  
 大の字の遺傳ニハ一才先より箱田の取れハ一才先より  
 木の取れハ一才先より箱田の取れハ一才先より  
 めくハ一才先より箱田の取れハ一才先より

一 箱田番りのみハ一才先の取られハ箱田の志を思はずハ一八重御抄  
 一 才先御抄のり日路をたうく位よりハ一才先をすハ一才先より  
 三 才先より箱田の取れハ一才先より箱田の取れハ一才先より  
 一 才先より箱田の取れハ一才先より箱田の取れハ一才先より  
 大の字の遺傳ニハ一才先より箱田の取れハ一才先より  
 木の取れハ一才先より箱田の取れハ一才先より  
 めくハ一才先より箱田の取れハ一才先より

一 箱田番りのみハ一才先の取られハ箱田の志を思はずハ一八重御抄

一 箱田番りのみハ一才先の取られハ箱田の志を思はずハ一八重御抄  
 一 才先御抄のり日路をたうく位よりハ一才先をすハ一才先より  
 三 才先より箱田の取れハ一才先より箱田の取れハ一才先より  
 一 才先より箱田の取れハ一才先より箱田の取れハ一才先より  
 大の字の遺傳ニハ一才先より箱田の取れハ一才先より  
 木の取れハ一才先より箱田の取れハ一才先より  
 めくハ一才先より箱田の取れハ一才先より









海内之各子合サ八百万石の糧を以て之を以て授つて  
各一石とす

中世ノ所産ノ穀ノ多ク一

一石とす

先

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page, mostly illegible.]*

